

農業

イメージは「良」 職業には「NO」

八戸学院大は26日までに、包括連携協定を結ぶ三戸町の農業労働力確保へ向け、2020年度に町内や首都圏などで実施した農業に関する意識調査の結果を公表した。いずれの年代も7割以上が農業に「良いイメージ」を持つていたが、職業として選択する可能性は最高でも2割ほどにとどまった。産業としての価値を認める一方、就農への関心が低い実態が明らかになり、同大は「実際の仕事や暮らしを知ってもらうための情報発信が重要だ」と指摘する。
(上條哲洋)

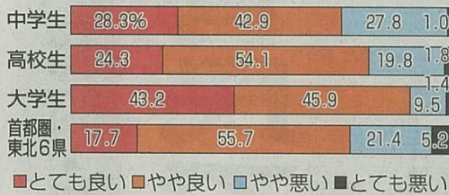
八学大

三戸中高生、首都圏在住者ら調査

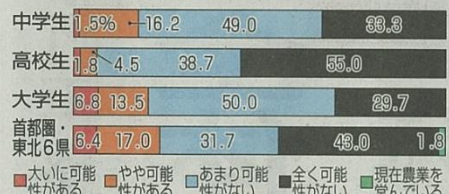
「実情、情報発信が重要」

調査は昨年12月から今年1月にかけて実施。三戸中1〜3年生198人と青森県立三戸高1〜3年生111人から書面調査を実施した。一方、「職業として農業を選択する可能性」で、八戸学院大生74人と「大いにある」「ややある」と答えた割合は、中学生17.7%、高校生6.3%、大学生6.3%、首都圏・東北6県23.4%、とどまり、特に高校生が低かった。同大地域経営学科の堤静子教授は「農業は食料を生かす産業で、食料の供給が不可欠だ」と話す。

農業のイメージ



職業として農業を選択する可能性



を支える産業として良いイメージを持たれているが、「重労働」「収入が不安定」という印象が強く、職業として選択されづらくなっている」と分析。「実際は作業の機械

化や効率化が進み、経営の仕方次第でしっかりと収入を得られる。情報発信や体験の機会を増やし、実情を知ってもらうことが重要だ」と話す。

同科3年の小川正太さ

ん(ひ)は「会社員なら業務内容や待遇が分かりやすいが、農業は収入や災害のリスクなど不透明な部分が多い。どう情報を出していけばいいかを今後も農家と一緒に考えてい」と強調。

同町の泉山農業組合で青年部長を務める藤原剛さん(53)は「経営ができれば農業は魅力のある仕事はない。多くの人に作業を体験してもらい、理解を進められたら」と話した。